

続々

ムツゴロウの博物志

畑 正 憲



続々ムツゴロウの博物志

定価 四六〇円

昭和四十六年七月十五日 印刷
昭和四十六年七月二十五日 発行

著 者 畑 正 憲

編集人 浜田 琉 司

発行人 朝居 正 彦

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒四五〇 名古屋市中村区堀内町
〒八〇二 北九州市小倉区紺屋町

印刷 東京ベル印刷 製本 大口製本

続々ムツゴロウの博物志
目次

でべそでーべそ／九

さなだ軍記／六

藤壺物語／三

ツル牧場／元

トン死／三

イソギンチャク／四

人体賛歌 I／四

人体賛歌 II／四

ペコの輿入れ／六

ペコの病氣／六

ペコの春／三

盲腸 I / 九

盲腸 II / 全

月とゴキブリ I / 全

月とゴキブリ II / 九

糞と尿 / 二四

卵の秘密 / 二〇

ドブの王様 / 二六

王様の子供たち / 二三

リスの台所 / 三六

蚊の涙 I / 三四

蚊の涙 II / 四二

マルクスの犬 I / 二四

マルクスの犬 II / 二五

ツルが伸びる I / 二六

ツルが伸びる II / 二七

イモリの袋 / 二八

近眼とATP / 二九

ノイローゼ / 三〇

イヌが咬む / 三一

性巷談 / 三二

鳥島病始末記 I / 三三

鳥島病始末記 II / 三九

ルナールに寄せて／三五

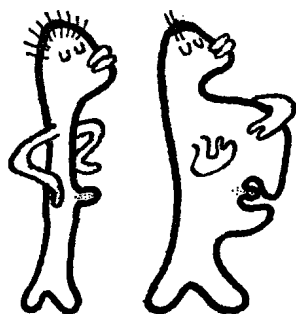
イメージ・チェンジ／三四

装幀・イラスト

著者

続々ムツゴロウの博物志

でべそでーべそ



遅いなあとぼやいた後で、彼はウェイトレスを呼びとめた。

「あ、君。水だ、水」

彼はとにかく水分をとる男である。私と喫茶店の席について三十分とたたないうちに、ジュース、コーヒー、紅茶を運ばせ、お冷やのコップをそのたびに空にしている。

ストレスにさらされたネズミは、副腎皮質ホルモンの影響で、水分を大量に要求するようになる。彼もやはりそのせいだろうかとは私は考えたりしていた。

古い友人である彼は、テレビの編成デスクである。その仕事の忙しさは格別で、毎分毎秒、身を削られる思いがするそうだ。だが、世の中はうまくいかないもので、彼の奥さんの言によると、忙しければ忙しいほど彼は肥ふとってくるという。

「ま、水ぶくれだわよね」

と酷評されているが、あごが三重にも四重にもくびれ、ものをいうと、たっぶんたっぶん、肉が前後にゆれて音をたてる感じがする。

「遅い。けしからん奴だ」

彼はナプキンを細かく割り、ストローを噛み割った。

私たちはある新人歌手を待っているのである。私は歌謡曲が大好きで、とりわけ女性の新人にはひとたまりもない。何とかして会いに行き、サインの一つもねだりたくなる。その熱が嵩じてくると、こうして彼を利用するのだが、私はちっとも待つことなど苦にはならない。

「なんだってね」

と私は、間をつなぐ話題を搜した。

「歌謡曲の世界って大変らしいね。新人新曲が入り乱れて」

「うん」

「おれたちがテレビで拝見するのは氷山の一角だってね」

「うん」

「だったらもっとバラエティーに富んだ曲が出て来てもいいじゃないか。もっと地道な生活感情に結びついた……」

「うん。そうだね」

と、彼はストローをぶっと吐き出し、

「おまえのいいたいのは、日本人の中にある固有のメロディーのことだろう」

「そうだ」

「おれにはねえ、子供のころ……、いや今でも耳にすると、からだ全体がじいんとしびれる曲がある」

「へえ」

私が背を伸ばして謹聴の姿勢を示すと、彼は低い声で歌ってくれた。

ばーか、ばーか、チンドン屋。

おまえのかあちゃん、でーべそ

歌い終わった友人は、まん丸い顔にはりついた目をまばたきもせず、

「どうだノ」

「そうだね」

「これは庶民の笑いとペーソスの結晶だ。おれはこの歌を聞くと、胸をかきむしられる感じがするよ」

「でーべそ……、がねえ」

「そうだよ。でべそじゃなく、でー、と引っ張るところに音楽がある」

「へ、へえ？」

「ま、聞いてくれ。小学校に上がる前から、おれのおへそはでべそだった」

「でべそは大抵その傾向があるさ」

「これがまた実に見事な色をして、形も手ごろだったので、おれはときどきチンコを二つ持っている気がして、へそをつまんでオシッコをしたので、ズボンを濡らしちまって、よくおふくろに叱られた」

「……………」

「宝物であると同時に厄介物だ。同級生に見せようものなら、なるほどなあ、などといじくり回された後で笑いのものにされた。おまえのかあちゃん、でーべそ、とね」

「だろうね」

「これほど人間的な持物はないのじゃないかとおれは思い続け、出来るなら歌謡曲にしようと決心さえしているんだよ」

「でも、動物にもでべそはあるぜ」

「えっ。本当か」

友人はポカンと口を開けた。

「大ありのコンコンチキさ。正確に言えば、でべそは臍ヘルニア。へその緒でつながっていた部分にある輪状の筋肉が閉じずに、そこから腸が出ているものさ。だから胎内で子供を育てる動物には、でべそになる危険性は大人より小なりあるわけだ」

「もちろんだよ。動物のおへそは、成長すると見えにくくなってしまふのが多いが、イヌでは、そうだね、チンなどは何割かがでべそだよ。生んだ子供の半分以上がでべそであることも珍しくないよ」

「……そうか。人間ばかりじゃないのか」

と、友人はさびしそうにつぶやいた。

「小さいのはご愛敬だがね。大きなもの、そう、君が今持ってるコップぐらいになつたら病的だから手術しなければならぬさ。だけどあれだよ、大人になつたら、大抵治つちまふものだがね」
「そうらしいね」

「初めて子供を持った時などには、おへそがピョコンととび出していたりして、大丈夫かなと心配したりする。どうしたらいいのかと迷って、おずおず手を触れたりすると、うどんをすすするような腸が動く音がして、おへそが引っこむ、そこへすかさず十円銅貨を押しつけてパンソウコウでとめる人がいたりする。赤ん坊のうちは腹筋がよく発達しないので、自然とでべそが多くなるが、^は這い這いをするころには綺麗^{きれ}になるのが普通なんだ」

「おれなんぞ、立ち立ちして引っこまず、友だちに笑われた時には、ナイフで切つちまおうと考へたりしたが、じっと見てみると、どうしても厄介ものとは思えなかつたなあ。何というか、親愛の情が湧いてきて」

「そうだよ。へそだって役に立っている」

「へ、そう」

「毛を失った人間の裏と表をたちどころに区別出来るし、妊娠した時、子宮底がへその位置までせり上がってきたら妊娠六カ月。恥骨とへその中間に子宮底があれば五カ月。虫垂炎だってそうだよ。へそと腰骨を結んだ線の間が痛ければ、一度はそうじゃないかと疑ってみなければならぬ」

「だけど、でべそには関係ないな」

「どうして」

「へそはついていればわかるもんな。ことさら出っ張っている必要ないじゃないか」

「それはそうだ」

私は目を伏せて、飲み残しのコーヒーを口に入れた。底に砂糖が沈澱でんしていて妙に甘ったるい味である。

友人はたばこを取出し、火をつけないままフィルターを噛んで、

「おれは最近、でべそという哀愁を忘れていた」

「そうかね」

「今の女房をもらう時、悩んで悩んで、悩み抜いたせいだろうか……」

「恥ずかしかったのか」

「いや。女房に間違われるのじゃないかと思ってね」

「まさか」

「笑うなよ。そのころは真剣だった。そこで一計を案じ、目をつぶって、手当たりしだい食いものをつめこんだ」

「へえ。それで肥ったのか」

「かくのごとしき。でもねえ、深夜ひとりで風呂ふろに入って、お腹なかにポツンと開いた穴を見ていると、なつかしいでべそに遇あいたくなって、ふうっと大きなため息が出る。そこでおれは、おまえのかあちゃん、でーべそと歌い、やるせない感傷にふける……」

「ふうん」

「で考えるのだけど、もしでべその娘がいたら、これはきつといい歌い手になる、そう信じてたけど、イヌにもでべそがいるんじゃ、存外つまらないかもしれない」

そういつて友人は、またもやウェイトレスに手を上げて、水だ、水、と大声で注文をして、あごの肉を前後左右にゆすっていた。